

市民が望む警察官像

——保育職を志望する学生の意見を中心に——

大 森 隆 子

この資料は、愛知県警察学校において、平成18年1月17日（火）午前10時30分から11時50分までの80分間、346名の受講生に「初任科生に対する特別教養」として行った講義メモである。

講義要綱

- I はじめに
 - ・教育の目的
 - ・「生きる力」を持つことと仕事・職業の関係
- II 『13歳のハローワーク』（村上龍著・幻冬舎）の中の警察官像
 - ・13歳（中学1年）の子どもへの職業紹介書
 - ・警察官という職業の特徴
- III 幼稚園や保育所の生活場面で、もしくは家庭での子育て場面に登場するおまわりさんの姿
 - ・遊びとおまわりさん
 - ・絵本とおまわりさん
 - ・しつけとおまわりさん
 - ・子どもの生活とおまわりさん
 - ・学生の創作した交通安全指導のミュージカルとおまわりさん
- IV 保育職を志望する学生へのアンケート結果
 - ・警察官との関わり体験
 - ・警察官の対応について
 - ・警察官に求めること
- V 警察官に望む職業倫理

I はじめに

私の本職は、幼稚園や保育所の先生になる人を養成する短期大学の教師である。最近、学生たちの質が変わってきたことに驚かされている。特に人間関係の面で弱く

なってきた。「大学を辞めたい」という学生にその訳を問うと、「〇〇さんと喧嘩したので顔を合わせたくない」とか、「私は悪くないのに皆が分かってくれない」などと、以前にはなかった理由を挙げる。

さて、皆は小学校・中学校・高等学校と学校教育をこれまでに受けてきたが、その教育の目的は何か、現在の文部科学省の見解並びに私の意見を述べたい。今、文部科学省が最も力を入れて言っているのが「生きる力を育てる」ということである。私も同様に思う。その背景には、若者のフリーター化、ニート化、日本全体の少子化社会への進行等への危機感が存在する。ところで皆は「生きる力」という言葉から何をイメージするか。私は次の3つが中心になると考える。その1は生活技能の習得、その2は生活費の獲得、その3は生きがいの発見である。その3つを備えて、初めて人間として社会人として自立して生きることができる、すなわち「生きる力」を持つと言えよう。心理学の視点から、「生きる」ことの意味について、生存、安全、所属と愛、自己肯定、自己表現という5段階に分類をする考え方もある。

「生きる力」の3つの要素が自分の職業と一致している場合は理想だが、現実には異なっているケースも多い。皆はどのように受け止めているか考えてみて欲しい。

II 『13歳のハローワーク』の中の警察官像

著者の村上龍氏は、将来の仕事・職業を考えさせるスタート年齢に13歳(中学1年)を設定した。氏は、この年齢の子どもたちは何より自分の好きなこと・好奇心を満たすことから出発して欲しいと願っている。したがって彼らの好奇心の延長線上に個々の仕事例を示すこととした。全体で518種の職業を、大きく5分類(自然と科学・アートと表現・スポーツと遊び・旅と旅行・生活と社会)し、それぞれ好奇心別に具体的な職業紹介を行っている。5つめの分類項目である生活と社会では、好奇心の種類を「心のことを考えるのが好き」「お料理が好き」「家やインテリアが好き」「おしゃれが好き」「人の役に立つのが好き」と5区分し、最後の「人の役に立つのが好き」の中の、“安全”の分野に警察官(他に海上保安官、警備員、探偵、ボディガード、救急救命士、レスキュー隊員)が位置づけられている。

III 幼稚園や保育所の生活場面で、もしくは家庭での子育て場面に登場するおまわりさんの姿

おまわりさんが登場する遊びと言えば、「泥棒と警察」、いわゆる「どろけー」が挙げられる。

絵本では、村山桂子作・堀内誠一絵の『たろうのおでかけ』(福音館書店)におまわりさんが描かれている。絵本の中から該当部分を拡大して映像で紹介する。その箇所の文は以下の通りである。

びびびびび…… おまわりさんが とんできました。

「いま わたっちゃ、だめ だめ だめ！」

「だって、ぼくたち とても いそぐの。うれしいことが あるんだもの」

と、たろうが いいました。

「おまけに、あいすくりーむが とけるから」 ちろーたちも いいました。

「それでも やっぱり、だめ だめ だめ。きいろで わたると けがをするから」

びびびびび…… おまわりさんが とんできました。

「いま わたっちゃ、だめ だめ だめ！」

「だって、ぼくたち とても いそぐの。うれしいことが あるんだもの」

と、たろうが いいました。

「おまけに、あいすくりーむが とけるから」 ちろーたちも いいました。

「それでも やっぱり、だめ だめ だめ。きいろで わたると けがをするから」

「いそいでいるのに、つまらない。 たろうが いいました。」

「つまらない」 ちろーたちも いいました。



(『たろうのおでかけ』より)

「いそいでいるのに、つまらない」 たろうが いいました。

「つまらない」 ちろーたちも いいました。

けれども、けがをするのは いやなので、おまわりさんの いうとおり、しんごうが あおに なるまで まちました。

また、童謡では「いぬのおまわりさん」（佐藤義美作詞・大中恩作曲）が親しまれている。以下に一番の歌詞を紹介する。

まいごのまいごの こねこちゃん
 あなたのおうちはどこですか
 おうちをきいても わからない
 なまえをきいても わからない
 ニャンニャンニャンニヤーン
 ニャンニャンニャンニヤーン
 ないてばかりいるこねこちゃん
 いぬのおまわりさん こまってしまうて
 ワンワンワンワーン
 ワンワンワンワーン

しつけ場面に登場する例としては、本吉圓子氏の『私の生活保育論』（フレーベル館）の中に事例がみられる。それは、忘れ物ばかりする子に、先生が「おまわりさんにお話ししてもらえば大丈夫かな」と言うと、直ちに効き目があったとのことである。また、作家北杜夫氏の文章（「私の履歴書」日経新聞・平成18年1月5日）にも、子ども時代を回想した箇所に、「道にひっくり返って泣きわめき、とうとうお巡りさんまで来たことがあった」とある。当時は子どもにとって、おまわりさんが身近でかつ恐れ存在であったことが分かる。

本学の学生（佐野ゼミ・18人）が創作した交通安全指導のミュージカルとおまわ

りさんの姿を紹介する（全体で16分の作品を6分に編集したもの）。



IV 保育職を志望する学生へのアンケート結果

保育職を希望する本学幼児教育・保育科の1年生118人に、①警察官との関わり体験、②警察官の対応、③警察官に求めることについてのアンケートを取った（平成17年12月）。その結果を要約すると、①の警察官との関わり体験では、「ある」と回答

した者が34人(29%)で、「ない」と回答した者が84人(71%)であった。したがって、約7割の学生はこれから出会う機会が初体験となる。若い皆が直接対応する可能性が大いにあるということになる。関わり体験(複数回答有り)を持っていた学生のうち、事故や事件面での一番は車の事故(29人)、次に盗難(23人)、続いて紛失・届出等落し物に関すること(17人)であった。この他学校での交通安全教室や護身術・麻薬の授業なども27人の学生が経験していた。数は少ないが、「小学校の登校を見守ってくれた」「朝、交番の前を通る時、あいさつを交わした」「弟が迷子になった時、保護してくれた」など幼い頃の思い出を語る者もいた。

②の警察官の対応については、「よかった」と回答した者が30人で、「悪かった」と回答した者が12人(重複回答有り)であった。「よかった」という内容をみると、「不安だったことを理解してくれたので泣けてきた」「心配して優しい言葉をかけてくれた」「詳しく聞いてくれた」「優しくかったが、しっかりしていた」「てきぱきと処理してくれた」「間違っていることについては、きちんと諭すように言ってくれた」などとあり、事故や事件の直接対応や解決以上に、その時の不安な気持ちを理解・共感してもらったことに感謝の念が集中していた。反対に「悪かった」という内容では、「追突事故直後に電話したが、何時間も後に警察官がきた」「相談したが、何もしてくれず、不安だけが大きくなった」などがあつた。

③の警察官に望むことでは、自分を含めて「市民や地域の安全を守ってほしい」が圧倒的で、具体的には、「子どもだからっ

て、軽く扱わないで」「事件に大小はない、小さなことでもしっかり対応してほしい」「交番には必ず一人は常駐してほしい」「昼夜のパトロールを増やしてほしい」「警察官が不祥事を起こすと、不信感を持つので気をつけてほしい」「ポスターにするなど、国民に提示や呼びかけをしてほしい」など様々な意見が出された。

警察官に対して、「自分の仕事に誇りと責任を持って働いてほしい」「いつもありがとうという感じを持っている」というエールも寄せられた。

V 警察官に望む職業倫理

私から望むことは、第1に法律や社会的ルールを守ること。法を破る人を捕縛する仕事であるのだから、市民一般のレベル以上のことが常に求められているという自覚である。そこから市民の信頼を得る以外に道はない。その2は、平等・公平という目線である。大人も子どもも、老人も若者も、知り合いも知らない人も、地位のある人もそうでない人も、差別することなく接することが基本である。自分に偏った味方をされるより、公平な対応の方が納得するものである。

警察官のイメージ形成は若い皆一人ひとりが負っていくもので、案外小さなことの積み重ねが大きな結果に通じることと考えられる。これから多くの経験を重ねて、力を付けていって欲しい。おそらく成功体験より失敗体験から学ぶことが多いであろう。くれぐれも“経験”を“慣れ”に繋げるのではないように、10ヶ月の学校生活を全うし、明後日の卒業式後、直ちに職務に就かれる皆の健闘を心より祈念する。